

トンボの姿を見かけない、チョウチョの数も少なくなった、セミの種類も減った

なるほど、言われてみるとその通りだ。

子どものころに遊んだ兵庫県加古川市の北のはずれには、多くの種類のトンボやチョウチョが飛び交い、セミの種類も多かった。

当時捕まえていたオニヤンマや麦わらトンボ、クロベラ、そしてイトトンボなどは今はほとんど見る事がなくなった。そして、チョウチョはといえば、アゲハはいるが、モンシロチョウやモンキチョウはめっきり減ったように思うし、よく見ていた小型のチョウは全く見なくなった。

セミともなればさらにその変化は大きい。主流を占めていたニイニイゼミやアブラゼミが姿を消し、クマゼミの独裁である。

トンボの幼虫はヤゴである。水底を漁ると必ずのようにヤゴがいた。そのヤゴの姿はもうないのでは、と思われる状況だ。

トンボの数が減ったということは、トンボが餌とする虫の数が減ったということかもしれない。田園には農薬が行き渡り、小さな虫の発生を抑えている。最近、燕の数が減ったように思えるのも、小虫の減少が関係しているのかもしれない。

自然を過去からの延長線上に考えると、その変化が見て取れ、そこに警報（アラーム）も隠されている。

日本経済新聞  
2019年(令和元年)9月16日(月曜日)

## トンボの姿を見かけない

公認会計士 見瀬 賢悟

最近、赤トンボを見なくなるといふ話をよく聞く。実際、私の住んでいる横浜の郊外でも、このところめっきり目にする事がなくなつた。地球温暖化の影響なのだろうか。さびしい気がする。

トンボはチョウチョに比べ、はるかにデリケートであり、環境の変化に反応するのが早い昆虫といわれている。トンボが飛んでいるということは、とりもなおさず人間が住むに適した環境であることを意味する。

トンボには、シオカラトンボのように劣悪な環境に強い種類と、逆に大型のヤンマ類や清流に住むサナエ系のように劣悪な環境に弱い種類がある。トンボをみると、その環境のよしあしが判断できるともいわれる。私は時折、トンボの観察のため国内外に出掛けるのだが、行く先々でこのことに納得して帰ってきている。

トンボにはもうひとつの判断指針がある。環境のパロメーターとしての動きを担っていると考えられることだ。人間の住む環境が悪化するれば、そこに生息するトンボは環境に弱いものから順に滅び、最後にはほとんどの種類のトンボを目にできなくなる。しかし、人間がそこに気付き、環境の改善に努力すると、環境に強いトンボから順に戻ってくるのである。

ここがホタルと違つところだ。ホタルも環境のパロメーターとされるが、一度滅びると人の手で幼虫を放流しない限り復活は望めない。すなわち環境の悪化は反映しても、その後の改善を反映するところができない。トンボの場合は飛ぶ力があり、長い時間かかっても戻ってきてくれるのだ。

我々は次世代の子供たちに人間の住みよい地球環境を残していかなければならない。そのためには現状の環境のよしあしを常にモニタリングして、悪化があれば改善策をとることにより、よりよい環境レベルを維持していく必要がある。

周りにトンボが生息し続けているか、トンボを目にできるか。それは、人間の住む環境を判断するうえで大事な指標といえる。トンボが周りに飛んでいれば誰しもハッピーになれる。昨今、ESG(環境・社会・企業統治)の重要性が叫ばれているが、身近なトンボの生息が守られているかということから考えてみたい。